慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	絶対か相対か : 同一性と種別概念の結び付きをめぐって
Sub Title	Absolute or relative? some controversies over the relationship between identity and sortal concepts
Author	横路, 佳幸(Yokoro, Yoshiyuki)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2016
Jtitle	哲學 No.137 (2016. 3) ,p.115- 143
JaLC DOI	
Abstract	What the relationship between identity and sortal concepts is like has been a problem for a long time. Peter Geach has championed what is called a relative identity thesis according to which identity must be relative to sortal concepts such as river and cat. Proponents of the particular kind of an absolute identity thesis, however, have taken some arguments against Geach's thesis, while they have agreed with the following basic idea : there are some strong ties between identity and sortal concepts. On the other hand, simple absolute identity theorists have even denied the idea and thus refused the sortalized elucidation of identity. In this paper I shall organize drastically several conflicts between these three theses into some straightforward and mutually-connected arguments and describe exactly what principle or idea is disputed among them. Based on this insight, I conclude my paper by offering criticism toward these theses respectively and suggesting which position each thesis leads to in terms of modern metaphysics about identity.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000137-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

絶対か相対か

――同一性と種別概念の結び付きをめぐって――

横　路　佳　幸*

Absolute or Relative?
Some Controversies over the Relationship between Identity and Sortal Concepts

Yoshiyuki Yokoro

What the relationship between identity and sortal concepts is like has been a problem for a long time. Peter Geach has championed what is called a relative identity thesis according to which identity must be relative to sortal concepts such as river and cat. Proponents of the particular kind of an absolute identity thesis, however, have taken some arguments against Geach's thesis, while they have agreed with the following basic idea: there are some strong ties between identity and sortal concepts. On the other hand, simple absolute identity theorists have even denied the idea and thus refused the sortalized elucidation of identity.

In this paper I shall organize drastically several conflicts between these three theses into some straightforward and mutually-connected arguments and describe exactly what principle or idea is disputed among them. Based on this insight, I conclude my paper by offering criticism toward these theses respectively and suggesting which position each thesis leads to in terms of modern metaphysics about identity.

* 慶應義塾大学／日本学術振興会

はじめに

同一性という関係そのものについてこれまで提唱されてきた哲学的理論を考えよう．そのうち最もショッキングだったものを並べるとすれば，その筆頭にピーター・ギーチによる相対的同一性説（以下，相対説と表記する）が挙げられるのは疑いない．その説によれば，「同一性」という語が果たすべき本来の役割は，哲学者や論理学者の多くが想定するようなものではなく，その関係の成立が種別概念（sortal concept）によって相対化されるような同一性を表現することである．ここで差し当たり「種別概念」と呼ばれるものを「ネコ」や「川」などの普通名詞によって表される概念とすると，提唱者であるギーチの考えでは，同一性にはネコや川などの種別概念が不可欠である．それらを付け加えない限り，「a と b が「同じ」であるかどうか，あるいは a が「同じ」であり続けるかどうかを判断することは意味をなさない」[1]．というのも，彼にとって「a は b と同一である」[2] は，種別概念 X（$\neq Y$）を包摂する「a は b と同じ X である」の省略あるいは断片にすぎず，それは「a は b と同じ Y である」から差別化されるからである．つまり相対説とは，「a は b と同じ X であるが，同じ Y ではない」という事態がありうることを受け入れ，さらに進んでそこから，「a は b と同一である」という形式の（絶対的な）同一性を不完全なものとして拒否する立場のことである [3]．

もちろん，こうした立場は容易に受け入れられるものではない．実際に，これまで展開されてきた同一性と種別概念に関する一連の議論において，相対説はしばしば批判の矢面に立たされてきた．端的に言えば，相対説は我々の古典的な同一性理解に著しく反する――相対説の「ショッキング」さもここに由来する――のである．その代わりに一連の議論の中で台頭した立場がある種の絶対的同一性説（以下，絶対説と表記する）であったのは，それが古典的な同一性の基礎を維持する点から想像に難くないだろう．とはいえ，単なる古典的な同一性理解にとどまらず，相対説の論駁

をも経た一部の「特殊な」絶対説は，相対説とあらゆる点で反目し合うというわけでもない．興味深いことに，種別概念を重視するような絶対説は――その代表的な支持者はデヴィッド・ウィギンズとE. J. ロウである[4]――相対説を受け入れがたいものとみなしながらも，「同一性と種別概念は何らかの仕方で結び付いている」というその基本的方針については共有する．言い換えれば，この種の絶対説は，相対説と古典的な同一性理解の間を縫うような主張を行うために，「素朴な」絶対説とも一線を画すことになる．そうして，ここに同一性と種別概念の結び付きをめぐる三つ巴の対立構図が顕在化する．すなわち，古典的かつ素朴な同一性説，相対説，そして「特殊な」絶対説である．

だが，こうした対立構図は，一見した単純さとは裏腹に多様な論点および互いに独立しているかのような議論を内包している．そのため，やみくもにこれらの対立についての見取り図を描こうとすると，漠然かつ錯綜した印象を与えてしまうのが実情である．そこで，本論文において私は次のことに取り組むことで，上の三つ巴の構図を中立的な観点から単純化・平明化させることを試みたい．それは，相対説と「特殊な」絶対説という二つの陣営の対立を単線的な議論へと再構成し，その係争点を取り出すことで，三つの立場がそれぞれ互いとどのような点で対立しているのかを明らかにするということである．

いまの構図を複雑にしている要因の一つは，「特殊な」絶対説が，相対説と近似しながらも決して相容れることがないということにある．それゆえ，構図を単純化するために，まずはこの絶対説と相対説の基本的主張を明らかにしたうえで，両者の対立を示す複数の独立した議論を相互に関連させて整理する必要がある．次に，そこで展開・整理された議論を基に，古典的同一性説を含めた三つの立場の決定的な対立点がどこにあるのか，言い換えれば，それぞれの立場がどのような考えや主張を「譲れないもの」としているのか――そしてそのためにどのような欠点を抱えることに

なるのか――を考察する．ただし，本論文において私は，これら三つの立場のうちどれが最も有望であるかを検討しない．また，この三つ以外の立場が本論文で展開される議論においてどのように手助けとなるかどうかも検討しない．その代わりに本論文の目的は，三つの立場がどのようにして対峙しているのかを明らかにすることで，三つ巴の対立の全体像によりはっきりとした輪郭を与え，その結果それぞれの立場がその他の立場からどのような点で批判されうるのかを論じることである．

本論文の構成は次の通りである．まず第１節で，種別概念がいかなる役割を担うものとして想定されるのかを簡潔に説明する．その役割は，相対説と絶対説の対立に直接的に関係するわけではないが，決して無関係というわけでもないことがのちに明らかとなる．次に第２節では，相対説が誤りであることを示すための議論を提示する．「特殊な」絶対説によるこの議論は非常に単純でありながら，非常に強力な相対説論駁と一般にはみなされている．続く第３節では，こうした議論に対する相対説による反論を提示し，第４節ではその反論に対する「特殊な」絶対説による再反論を提示する．もちろん，論争の歴史を紐解けば，こうした一連の秩序立った仕方で議論が展開されたわけではないのは明らかである．しかし，以上の大幅かつ意図的な再構成によって，相対説と「特殊な」絶対説の間でどのような主張がなされていたのかがより鮮明となるはずである．第５節でその両者の間の決定的な対立点を二つ挙げた後，最後に第６節で三つ巴の対立構図がどのような対立に基づいているのかを示すと同時に，各々の立場の欠点を見る．

§1　予備的考察：種別概念と同一性の規準

本節では，同一性に関する議論に入る前の予備的考察として，種別概念がどのようなものであるかを簡単に確認する．種別概念の例に何を含めるのかについてはいくつか議論があるものの[5]，先に触れたように，本論文

ではひとまずネコや川などを典型例とみなしておこう．すると，ネコや川などの種別概念はどのような役割を担うものなのだろうか．

主要な論者の多くが認めている通り，種別概念は同一性の規準（criterion of identity）を与えるものである[6]．同一性の規準を哲学的議論のうちにはじめて持ち込んだと考えられるゴットロープ・フレーゲによれば，その規準とは「記号 a が我々にある対象を表すはずであるとき，（…）b が a と同一かどうかをあまねく決定するような規準」[7] を指す．いま，ある同一性の規準がある種別概念 X によって与えられるのだとすると，その規準は次のような一般的形式を持つ[8]．

(1)　$\forall x \forall y((Xx \ \& \ Xy) \rightarrow (x=y \leftrightarrow x$ と y の間には同値関係 R_e が成立する$))$

そこに登場する「R_e」を特定の同値関係を表す図式文字とすると，(1) が述べているのは次のことである．すなわち，両者の間の同一性が問題となっている任意の x と y について，それらがともにある種別概念 X に属するならば，それらが同一であるのは，ある特定の同値関係 R_e が成立するときかつそのときに限る．(1) の典型例は，X に「集合」が当てはまるケースである．「集合である」を S とすると，集合によって与えられる同一性の規準は次のようになる．

(2)　$\forall x \forall y((Sx \ \& \ Sy) \rightarrow (x=y \leftrightarrow x$ と y は同じ成員を持つ$))$

(2) は，集合に属する s と s^* について，それらが同一かどうかは同じ成員を持つかどうかと必要十分条件の関係にあることを述べている．成員を異にすれば s と s^* は同一ではないが，成員を同じくする限りそれらは同一であり続ける．これが，いわゆる外延性の原理に等しいことはいまや明らかだろう．集合という種別概念によって与えられるのは，こうした原理や規準にほかならない．

ただし，注意すべきことが一つある．それは，(1) の種別概念 X に何が割り当てられるのかによって，同値関係 R_e も大きく変動しうるということである．言い換えれば，種別概念ごとに固有の同一性の規準が提供されるという事実，すなわち規準の種別的多様性に我々は目を向ける必要がある．たとえば，ネコという種別概念 C によって与えられるのは，次のような（未完成の）規準である．

(3) $\forall x \forall y((Cx \ \& \ Cy) \rightarrow (x=y \leftrightarrow x$ と y の間には同値関係 R_1 が成立する))

他方，島という種別概念 IS によって与えられるのは次のような（未完成の）規準である．

(4) $\forall x \forall y$ $((ISx \ \& \ ISy) \rightarrow (x=y \leftrightarrow x$ と y の間には同値関係 R_2 が成立する))

(3) と (4) それぞれにおける R_1 と R_2 がまったく異なる同値関係であることは容易に推測できる．候補の一例として，R_1 には「同じ生涯（Life）を持つ」などが，R_2 には「同じ高潮時に水没しない陸地である」などが割り当てられるかもしれない[9]．そのとき，(3) と (4) は，同一性を判定する際にまったく異なる規準がネコと島によって課されるのだということを表現する．でなければ，ネコと島という二つの種別概念の間の違いを適切に表現できず，そうした規準は二つの概念に関する我々の自然かつ素朴な理解に反することになるだろう．水に潜ったネコはネコであり続けるが，島の場合（高潮時に）水没したときそれはもはや島ではない．その違いはつまるところ，(3) と (4) における同値関係 R_1 と R_2 の違いに由来する．

このように種別概念は，(1) の形式を持つ同一性の規準を与えるものである一方で，どのような規準が与えられるかについては各々の種別概念に

よって異なる．もちろん，種別概念と同一性の規準の関係性についての注意事項は他にもあるが[10]，本論文の目的に照らせば以上の説明で種別概念についての予備的考察は十分である．同一性と種別概念の結び付きをめぐる相対説と絶対説の対立を追うため，我々は先を急ぐことにしよう．なお，次節以降で登場する「絶対説」は，特に断りがない限り，冒頭で簡潔に紹介した「特殊な」絶対説を指すものとする．

§2　絶対説による相対説論駁

本節から第4節までの仕事は，相対説と絶対説の間の対立を再構成することである．その際いくつかの議論や論点が登場するが，適切に整理された形で展開すればそれらはそれほど込み入ったものではない．本節では，絶対説論者が相対説の誤りを示すための議論を提出する．次節では，相対説論者がその議論の誤りを示す反論を提出する．次々節では，絶対説論者がその反論の誤りを示す再反論を提出する．

本題に入る前に，一般に絶対説とその否定的立場である相対説の両者がどのような主張を行うとされるかを確認しておこう．二階の量化と変項を用いて，前者の絶対説は次のように形式化されうる[11]．

（A）　$\forall x \forall y \forall F \forall G((x =_F y \ \& \ Gx \ \& \ Gy) \rightarrow (x =_G y))$

そこに登場する記号「F」と「G」は，川やネコなどの種別概念の上を走る変項とし，「$x =_F y$」と「$x =_G y$」は，それぞれ種別概念FやGに制限された同一性，すなわち「xはyと同じFである」および「xはyと同じGである」を意味するものとする（以下も同様）．いま，絶対的同一性を表すとされる（A）が述べているのは次のことである．すなわち，xとyが同じFであり，かつxとyがともにGならば，そのときxはyと同じGである．お馴染みの例から，この主張の妥当性を見ることができる．もしキケロとタリーが同じ人物（同一人物）であり，かつキケロとタリーがと

もに（生物学上の）人間ならば，そのときキケロとタリーは同じ（生物学上の）人間に違いない．

しかし，相対説によれば，たしかに（A）に従うような例はいくつか存在するにせよ，（A）と衝突するような例もまた存在するとされる．たとえば，a と b が同じ川であり，かつ a と b がともに水の粒の集まりであるとしよう．そのとき，a は b と必ずしも同じ水の粒の集まりである必要はない．たとえ他のわずかな量の水滴と結び付いても，a と b は同じ川のままだとみなしてもよいが，それらはもはや同じ水の粒の集まりではないからである．この例が特殊事例ではないことは，F と G にそれぞれ像と粘土の塊，あるいはネコと部分（胴体や毛など）の集まりなどを割り当てれば明らかである[12]．そこで，こうした一連の（A）に対する反例は，次のように一般化することができる．

（R*）　$a =_X b \ \&\ Ya \ \&\ Yb \ \&\ a \neq_Y b$

そこに登場する「a」と「b」は個体定項の図式文字，「X」と「Y」は種別概念の定項の図式文字であるとする（以下も同様）．（R*）が述べているのは，「a は b と同じ X であり，かつ a と b はともに Y であり，かつ a は b と同じ Y ではない」という，現実の事例に基づいた図式的な命題である．相対説論者は，これをさらに一般化することで次を得る[13]．

（R）　$\exists x \exists y \exists F \exists G\,(x =_F y \ \&\ Gx \ \&\ Gy \ \&\ x \neq_G y)$

（R）は（A）の否定と同値である．よって，（R*）のような形式によって示される反例が存在する限り，同一性の絶対性を表現する（A）は拒否されねばならない．ギーチの言葉を借りれば，「原則として私は，異なる X であるものが同一の Y であることに反対できない．ことによると，（…）異なる紋章官は同一の人間かもしれない」[14] ため，$a=b$ という形式を有する同一性は「断片的である」[15] あるいは「統語論的に独立した部分ではな

い」[16]ことになり，それゆえに「論理学者が想定してきたような絶対的同一性など存在しない」[17]のである．

こうした主張を行う相対説に対して，絶対説論者は次のように論じる．たしかに，上で提示された（R*）に基づく事例を，（A）だけで説明することに困難がある点は認めなければならない．だが，そうしたいくつかの事例から（A）の否定をただちに導くのは誤りである．論理的真理を表す次の二つの原理をおけば，（R）および（R*）が偽であることは容易に示されうる．

（SLL）　$\forall x \forall y (\exists F(x =_F y) \rightarrow \forall \Phi (\Phi x \leftrightarrow \Phi y))$

（REF）　$\forall x \forall F(Fx \rightarrow x =_F x)$

（SLL）は，いわば「種別化されたライプニッツの原理（sortalized Leibniz's law）」である．それは，次のライプニッツの原理（Leibniz's law）によって支えられる同一性の不可識別性を「同じFである」に制限したものである．

（LL）　$\forall x \forall y (x = y \rightarrow \forall \Phi (\Phi x \leftrightarrow \Phi y))$

他方，「＝」によって表現される同一性関係の形式的・論理的な性質の一つである反射的（reflexive）関係を「同じFである」に対応させたものが（REF）である[18]．ここで，（SLL）のうちの性質の変項Φに「aと同じYである」を割り当て，さらに（R*）における最初の二つの連言肢を仮定すると，（R*）および（R）が誤りであることを簡単に証明することができる[19]．ゆえに，様々な事例による説得性にもかかわらず，相対説は明らかな誤りを含む理論であることが示されうるのである．

§3　相対説による絶対説への反論

この論証に対して，相対説論者はどのような応答を行うだろうか．極め

て簡単な推論規則しか用いられていないのだから，その妥当性についてはおそらく異論がないだろう．相対説論者によって論駁されうるのは，むしろその健全性，すなわち前提として置かれた（SLL）あるいは（REF）の正しさである．誤った前提が置かれているのだから，誤った結論が導かれたにすぎない．相対説論者はそう論じるはずである．

すると，（SLL）と（REF）のうち，どちらが「誤った前提」なのだろうか．後者の（REF）の拒否は，たとえば「ティブルスがネコだとしても，ティブルスはティブルスと同じネコではない」という事態を受け入れる点であまりに直観や常識からかけ離れた帰結を引き出すばかりでなく，のちに明らかとなるように，その方策特有の困難に直面する（第５節を見よ）．そのため，ここでは（REF）よりも先に，より重要だと思われる前者の（SLL）の妥当性の検討を行っておくことにしよう．前節の論証においてこの（SLL）が，（LL）と同じく論理的真理であるとみなされたのは次のような理由による．すなわち，$a=_X b \leftrightarrow (Xa \ \& \ Xb \ \& \ a=b)$ という，「$=_X$」と「$=$」の間を取り結ぶ原理――これをフレーゲにちなんで「フレーゲの原理（Frege's principle）」と呼んでおこう[20]――を認めさえすれば，その原理と（LL）から（SLL）を簡単に導くことができるからである．だが，（SLL）を導くのに不可欠なフレーゲの原理は本当に正しいのか．「正しくない」というのが，（SLL）を拒否する相対説論者の応答である．

もちろん，（SLL）を拒否するという目的さえ達成すればよいのであれば，フレーゲの原理まで拒否する必要はなく，（LL）を拒否するだけできっと十分だろう．しかし，（SLL）を拒否するのにくわえて相対説を維持するという目的のもとでは，（LL）の拒否だけでは不十分である．というのも，フレーゲの原理が，前節で相対説を表すとされた（R）およびその図式的事例である（R*）と論理的に衝突することは明白だからである．（R*）とフレーゲの原理を同時に認めた場合，それは $a=b \ \& \ a \neq b$ という

矛盾した帰結を招く．そのため，（R）を擁護する相対説論者にとって，（LL）を拒否してフレーゲの原理を維持するという選択肢はありえない．彼らはその原理の誤りを示さねばならないのである．

では，フレーゲの原理はいかにして誤りなのだろうか．「川」と「水（の塊）」を例にとって考えると，いま問題となっている原理は次の仕方で拒否される[21]．最初に，ある川 a と b が同じ川であるとする．R を「川である」と解釈すると，それを「$a=_R b$」と表記できる．次に，フレーゲの原理が正しいと仮定する．それは次のような原理である．

（FP）　$\forall x \forall y \forall F\,(x=_F y \leftrightarrow (Fx \,\&\, Fy \,\&\, x=y))$

この仮定（FP）と先の $a=_R b$ から，$Ra \,\&\, Rb \,\&\, a=b$ が得られる．他方，時空領域を常に同じくするために川であるものはすべて水でもあるはずである．W を「水である」を表すとすると，それは次の原理が正しいことを意味する．

（5）　$\forall x\,(Rx \rightarrow Wx)$

先に得られた $Ra \,\&\, Rb \,\&\, a=b$ とこの（5）から，$Wa \,\&\, Wb \,\&\, a=b$ が得られるため，これに再び（FP）を適用すると，次の

（6）　$a=_W b$

すなわち「a が b と同じ水である」が導かれる．しかし，この帰結は誤りである．なぜならば，時間の経過などの理由から構成要素に微細な変化が起こったとき，a と b は同じ川であり続けながらも，それらは同じ水（の塊）であるとは限らないからである．そのことは，まさしく（R）や（R*）によって端的に示されている．それゆえ，誤った結論が導かれたため，仮定として置かれた（FP）は拒否されねばならない．ギーチの言葉では，「「同じ水であること」は，「同じであり（…）かつ水である」に分析する

ことができない」[22] と言い換えることができる．

以上の論証から帰結するのは，いったん（FP）を諦めることになれば，「$a=_X b$」という形式の文は「a は X であり，かつ b は X である」と「a は b と同一である」という二つの述定の連言にパラフレーズされえないため，（SLL）もまた疑問視されるということである．（SLL）の前件を満たす式，たとえば $a=_X b$ が成立するとき，本来ならばそれと（FP）から $a=b$ が成立するため，（LL）により（SLL）の後件文も導出されるはずであるのに対し，（FP）を認めない者にとって（SLL）を正しい原理として置く根拠はどこにもない．すると，疑わしい（SLL）を仮定に置いた前節での論証は健全ではないということになる．その結果，（R）および（R*）が偽であるという結論は導出されず，相対説の考えが妥当なものとして復権すると相対説論者は主張することができる．つまり，（FP）という原理の拒否は，（R）および（R*）を維持するために不可欠であると同時に，前節の論証における（SLL）の妥当性の根拠を薄弱にするためにも不可欠なのである．このように見ると，相対説の本当の眼目とは，（A）と衝突する事例が遍在するという事実を根拠にして（R）を導出することや（SLL）を端的に拒否することというよりも――それらは相対的同一性説の説明として間違っているわけではないのだが――むしろ同一性の分析可能性に関する（FP）を拒否することで，（SLL）ひいては（A）が真ではないと示すことだと言えよう[23]．つまり，（A）の維持に不可欠な（FP）を拒否することは，相対的同一性を擁護する，あるいは絶対説論者による反駁に応答する際に決定的な役割を果たすのである．

§4　絶対説による相対説への再反論

だが，絶対説論者から見れば上の論証は受け入れがたいものである．すると，（FP）ひいては（SLL）を守るために，一般的な絶対説はその論証に対してどのような応答をするのだろうか．目下のところ，とりうる選択

肢は二つしかない．一つは（5）を偽とみなすもの，もう一つは（6）を真とみなすものである．実を言えばこの違いが「特殊な」絶対説と古典的な絶対的同一性説を隔てる分水嶺となるのだが，ここでは後者を脇におき，前者の（5）の拒否がいかなる帰結を生むのかを見ておこう．

（5）を拒否する絶対説論者によれば，種別概念によって与えられる同一性の規準の存在を我々は適切かつ真剣に受け止めるべきである．「川であるものはすべて水である」ということを述べる原理が誤りである理由は，川と水という二つの種別概念によって与えられる同一性の規準の差異によって端的に示される．その規準とは次の二つである．

（7）　$\forall x \forall y$（$(Rx \ \& \ Ry) \rightarrow (x=y \leftrightarrow x$ と y は同じ水路を持つ$)$）

（8）　$\forall x \forall y$（$(Wx \ \& \ Wy) \rightarrow (x=y \leftrightarrow x$ と y は同じ水素結合した分子を持つ$)$）

もちろん，これら二つの規準は非常に大ざっぱで不正確かもしれないが，当面の目標のもとではこれで十分である．（7）と（8）が示すのは，川と水双方の概念によって与えられる規準に現れる同値関係がまったく異なるものだということである．そこから，川に属するとされるものは必ずしも水に属するわけではないということを導くことができる．言い換えれば，川という種別概念を例化する個物は――時空領域を完全に同じくするとしても――水という種別概念を例化する個物から存在論的に区別されねばならない．

絶対説論者によるこうした主張は，相対説とある共通点を持っている．それは，「川と水の同一性の規準が明確に異なる」ということを認め，そのために「a が b と同じ川である」ことを受け入れながらも「a が b と同じ水である」ことを拒否しうるという点である．しかし，そこから（R）および（R*）を導き出した点に相対説の誤りがあると絶対説論者ならば論じるだろう．同一性の規準の多様性（diversity of criteria of identity）を

重視しながらも（R）および（R*）にコミットせずに済むには，「a と b が同じ X であると同時に c（$\neq a$）と d（$\neq b$）が同じ Y でない（a と b は X に属し，c と d は Y に属する）」ということを述べる次のようなケースの存在とその量化文を認めることである．

（DCI*） $a=_X b \ \&\ Yc \ \&\ Yd \ \&\ c\neq_Y d \ \&\ a\neq c \ \&\ b\neq d$

（DCI） $\exists x\exists y\exists z\exists w\exists F\exists G\,(x=_F y \ \&\ Gz \ \&\ Gw \ \&\ z\neq_G w \ \&\ x\neq z \ \&\ y\neq w)$

（DCI）が（R）と明らかに異なっている点は，量化されるべき個物が三つ（a と b, c, d のうち a と b は同一である）登場するところである．（R*）では，川に属する個物と水に属する個物が区別されずに，それらの種別概念に制限された同一性がともに a と b だけの間で成立するかどうかが問題となっていた．だが，絶対説によれば，「二つの種別概念が異なる同一性の規準に従うとき，これらのうち一方の概念に属する個体と，もう片方の概念に属する個体を同一視するのは意味をなさない」[24] ために，川に属する個物である a は，水に属する個物 c から存在論的に区別されねばならない．でなければ，（7）や（8）の同一性の規準を重視する者は，（FP）や（A）の棄却を避けられないだろう．相対説とは異なり，絶対説にとって同一性の規準が多様であることは，同一性関係の多様さや相対性，すなわち「同一性が常にその規準に相対的である」[25] ということを含意しない．同一性の規準の多様性またはその種別的相対性は，むしろ個物が細かく切り分けられていることに種別概念およびそれらが与える規準の多様性が対応していることを意味するとみなすべきだとされる．そのため，（5）を偽と考える絶対説の戦略は，同一性の規準に多様性が存在することを認めうる点で相対説と軌を一にするが，（R）を拒否する代わりに（DCI）を受け入れる点でそれと決定的に対立している．

個物と同一性の規準の間の関係性を正しく理解するには，他の例との対

比が助けとなる．いま，二つの種別概念，すなわちネコと哺乳類を考えよう．それらをそれぞれ C と M として解釈すると，(5) と同じ仕方で我々は次を得る．

(9)　$\forall x(Cx \rightarrow Mx)$

ここで先の相対説論者による論証と類比的に，a と b が同じネコであると前提する．すると，その前提と (9)，(FP) から次が導かれる．

(10)　$a =_M b$

先の論証とは異なり，このケースでは (10)，すなわち「a が b と同じ哺乳類である」ことに何らおかしい点はない．なぜだろうか．それは次のような事実に由来する．すなわち，ネコという種別概念によって提供される同一性の規準は，哺乳類という種別概念によって提供される規準に含まれるという事実である．その事実は，たとえば生物学的なネコ科が生物学的な哺乳綱の下位階層であることによってよく示されるだろう．このため，いまのケースでは，(9) が真とみなされることに不思議はなく，ひいては (10) もまた真とみなされてよい．相対説論者が (FP) への反証としてこうした例に頼ることがないのはそのためであり，そこで絶対説による解決と反目することもない．

ところが，川と水のケースでは事情が大きく異なる．(7) と (8) を見れば明らかであるように，川と水によって与えられる同一性の規準は，どちらか一方が他方を含んでいるような関係にはない．そのため，(9) とは違い，個物の同一性を決定する規準が単一ではないことを根拠として，(5) は偽とみなされるべきだと絶対説論者は主張する．(7) と (8) の間に明らかな相違があるからといって――(5) という個別的な原理を棄却するにせよ――(FP) という一般的原理そのものを拒否するのは少なくともやりすぎであるうえ，(7) と (8) の間の違いは (DCI) によって説明す

ることができるというわけである．したがって，絶対説によれば，まったく異なる同一性の規準を提供する種別概念に属する個物は数的に異なる個物であると認めさえすれば，相対説論者のように（FP），ひいては（SLL）や（A）を拒否することなく，「川は同じ分子をもはや持っていないとしても，水路さえ同じであれば同じ川であり続けるだろう」という直観を維持できるのである．

もし以上の絶対説による議論が正しければ，それは（FP）を拒否するという犠牲を払うことなく，前節における相対説による論証を退けることができる．同一性の相対性を示す証拠となるかのような数々の例――「同じ像だが同じ粘土の塊ではない」や「同じネコだが同じ部分（胴体や毛など）の集まりではない」など――をたしかに（A）だけで対処するのは困難だが，絶対的同一性への疑念，特に（FP）に対する懐疑は，（5）を拒否すること，つまり（DCI）を受け入れることで霧消する．それゆえ，第2節において（SLL）が正しくあるのを妨げていた障害もまたなし崩し的に排除され，（R*）および（R）が誤りであることもまた示される．（7）と（8）に代表される同一性の規準の多様性は，せいぜい（5）を拒否し（DCI）を支持するのみであって，それは（R）を認めるものではなく，まして（FP）や（SLL），（A）を拒絶するものでもない．（A）に対して相対説論者が提出する反例は，結局のところ（DCI）および（DCI*）の例証にすぎない．以上のような道筋で，絶対説論者は（A）を相対説論者による攻撃から守ることができる．

§5　二つの係争点

以上より，相対説と絶対説それぞれが，恣意的に再構成された形であれ，どのように対立しているのかある程度明らかとなった．この節では，相対説と絶対説の決定的な係争点がどこに存しているのかを整理し要約することにしよう．大まかに言えば，その主な係争点は二つに絞られる．

二つのうち，一つは明らかに（FP）の正否である．絶対説は（FP）を支持せねばならず，相対説は（FP）を拒否せねばならない．このことは，二つの観点から確かめることができる．

まず，絶対説にとっての（FP）の重要性は，（A）が（FP）とある原理の二つから導くことができる点に象徴される．その原理とは，端的な同一性と種別概念に制限された同一性の間の「親和性（affinity）」を表す次の原理のことである．

（AFF）　$\forall x \forall y (x = y \leftrightarrow \exists F (x =_F y))$

この（AFF）と（FP）から，同一性の絶対性を表す（A）を導出することができる[26]．そうである以上，絶対説論者は（FP）と（AFF）の双方を擁護する必要がある．そして興味深いことに，その一方である（AFF）は，もう一方の（FP）と相対説論者も認めうる次の原理から得られる[27]．

（NBP）　$\forall x \exists F (Fx)$

（NBP）は「裸の個物の不在（no bare particular）」を表すテーゼである[28]．これは，絶対説のみならず相対説にも共有されうるテーゼである．なぜならば，もし裸の個物が存在すると認めてしまうと，裸の個物の同一性については絶対的同一性が成立しうることになる，すなわち「あらゆる同一性が相対的である」という一般的主張を諦めざるをえなくなるからである．そのため，（A）を放棄したい相対説論者からすれば，（NBP）ではなく（FP）の成立の阻止が極めて重要な役割を担う．逆に言えば，（A）を維持する絶対説論者からすれば，（FP）こそがその立場に特有の原理であることがわかる．

（FP）の重要性は，種別的述定（sortal predication）を導く次のような図式からも確認することができる．

（SP）　$\exists x(a=_X x)\rightarrow Xa$

一方の相対説論者によれば，（SP）とは，種別概念に相対化された同一性の「脱関係化（derelativisation）」を経て初めて種別的述定が生まれるということを述べる原理である．脱関係化とは，たとえば「a は b の兄である」という関係から「a は兄である」という一項述語による述定を作ることを指す[29]．このとき重要なのは，前者の関係から後者の述定が生まれ定義されるのであって，その逆でないということである．これと同じように，「a はある x と同じ X である」という関係から「a は X である」という述定が生まれ定義されるのであって，その逆でないと相対説論者は強調する[30]．他方，絶対説論者は，（SP）における前件の論理的・意味論的先行性を拒否しながらも――つまり（SP）の逆を受け入れながらも――相対説と同じように（SP）を受け入れる．その際，絶対説が一方的な「脱関係化」に頼る必要がないのは，（SP）が（FP）より直接導出できることから明らかである．こうした点からも，絶対説にとって（FP）が非常に重要な原理であることが理解されるだろう．

次に，二つ目の観点へ移ろう．もし（FP）が絶対説論者にとって必須の原理であるならば，裏返せばこのことは，相対説と（FP）の拒否が密接に関連していることを意味する．ここで，第3節においてその検討を残したままにしていた立場を思い出してほしい．その立場とは，第2節で提示された相対的同一性説を論駁する論証に対して，（SLL）の代わりに（REF）――制限された同一性の反射性――を棄却するような相対説のことである[31]．率直に言えば，こうしたバージョンの相対説にはある決定的な問題を提出することができる．その問題とは，（SLL）の正しさを維持しながら（REF）を拒否したとしても，最終的に拒否するものを（REF）だけに留めておくことができないというものである．たしかに，第2節における相対説論駁をかわすために（REF）さえ捨て去ることができれば

（R）を維持することが可能であるように見える．しかし，すぐ先に示したように，（A）は（AFF）と（FP）から導出されてしまうことから，（A）の否定である（R）は（AFF）と（FP）の組み合わせと論理的に衝突してしまう．そのため，（R）を掲げながらも（REF）を拒否する相対説は，その拒否とは独立に，（AFF）あるいは（FP）のいずれかを拒否せねばならない．だが，先に述べたように，（AFF）は（FP）と（NBP）から導出されるものであったのにくわえて，相対説にとっても（NBP）は支持するに値するテーゼなのだった．すると，残る選択肢はたった一つ，すなわち（FP）を拒否するという選択肢しかない．こうした選択を行う立場がもはや，（SLL）を破棄するバージョンの相対説とほとんど変わらないものであるのは明らかである．つまり，（SLL）の代わりに（REF）の拒否へと向かう道は，（R）に導かれる限り，回りまわって（FP），ひいては（SLL）を拒否する道へと通じてしまうのである．よって，第2節の論証に対して（REF）だけを拒否する相対説は見込みがなく，結局のところ相対説は（FP）の拒否と不可分の関係にあると言えよう．

続いて，（FP）と並んで，相対説と絶対説の決定的な対立を生むもう一つの係争点とは（DCI）の正否である．絶対説は（DCI）を支持せねばならず，相対説は（DCI）を拒否せねばならない．このこともまた二つの観点から確かめることができる．

まず，（DCI）は（A）と整合的である一方で，（R）とは不整合である．そもそも（DCI）が問題となるケースは，川と水のように，種別概念 X と Y がまったく異なる同一性の規準を与える場合に限られる．（DCI）は，同一性の規準の種別的相対性が個物の切り分けに対応することを述べるテーゼだった．つまり，仮に時空領域を共有していたとしても，まったく異なる種別概念に属する a と b は数的に区別されねばならない．この区別があるおかげで，いまのケースでも（A）は成立する．というのも，（DCI）

を満たすような a と b は（A）の前件を決して満たすことがないゆえに，（A）の条件文全体はトリヴィアルに成立するからである（（A）がトリヴィアルでなくなるのは，ネコと哺乳類のペアのように，一方の種別概念 X が他方の概念 Y を包摂する場合などである）．したがって，（A）と（DCI）は互いに衝突することなく成立すると言える．他方，（R）と（DCI）が不整合を来たすのは明白である．というのも，（R）と（DCI）の両者が相容れないという事実は，異なる同一性の規準を与える二つの種別概念と同一性の結び付きが問題となる際に，同一性を二つの概念に相対化するのか，それとも個物の切り分け方を二つの概念に応じて細分化するのかという二つの異なる見方に依存しているからである．それゆえ，（DCI）は，たとえば「a と b は同じ川だが，同じ水ではない」という事例が（R）によって説明されることを拒否しながらも，そうした事例に備わっている説得性を自然に説明する役割を果たし，（DCI）を認めることは実質的に（R）を拒否することなのである．

次に，絶対説論者が（DCI）を受け入れることになった理由を考えよう．その理由は，第３節での相対説からの反論に応答する中で，（FP）の代わりに（5）を拒否したためである．だがそのとき，第４節の冒頭で示唆したように，（5）を拒否する代わりに（6）を正しい帰結だと結論づける選択肢を絶対説論者はとれなかったのだろうか．もし a と b が同じ川であるならば，a と b は同じ水でもあると主張することができれば，（6）を誤った帰結とみなすのがそもそもの誤りであることになり，相対説による論証は失敗すると同時に，（5）の拒否から（DCI）を引き出す必要性にも迫られないだろう．だが，絶対説はこの選択肢をとらなかった．なぜだろうか．

正確に言えば，いまの選択肢を認めないのは，絶対説のうちでも「特殊な」ものに限られる．というのも，（6）が必ずしも真にならないことは，（7）と（8）から明らかだからである．（7）と（8）を同時に受け入れる

と，同じ水路を持つことと（7）から *a* と *b* は同一である一方で，同じ分子を持っていないことと（8）から *a* と *b* は同一ではないことが導かれるという自家撞着に陥る．その自家撞着を避けるには，相対説のように同一性を相対化するか，あるいは「特殊な」絶対説のように「同じ分子を持っていないことと（8）から水に属する *c* と *d*――川に属する *a* と *b* ではなく――は同一ではない」と主張するほかない．つまり，川と水という種別概念がそれぞれ（7）と（8）のように固有の同一性の規準を与えるものだと考える限り，絶対説は（6）を正しい帰結とみなすことはできず，さらに相対説に傾かないでおくには，（5）を拒否し（DCI）を認めざるをえないのである．ここに，「特殊な」絶対説が（DCI）を支持せねばならない事情がある．

よって以上から，相対説と絶対説の決定的な対立点は，（FP）および（DCI）の正否に帰せられるとまとめることができる．

§6　結論：三つ巴の対立構図

最後に，前節での帰結を念頭に置きながら，本論文の冒頭で簡単に触れた「三つ巴の対立」がどのようなものであるかという問いに戻ろう．三つ巴の対立の内実が明らかとなれば，それぞれの立場がどのように批判されうるのかもまた明らかとなるだろう．

問題となる「三つ巴」とは，相対説，絶対説，古典的同一性説のことである．我々がいまだその主張を確認していないのは，最後の古典的同一性説だが，すでにその端緒は確認していると言ってよい．古典的同一性説は，多くの哲学者や論理学者がそうみなしてきたように，同一性をいかなる種別概念にも絶対的であると認めつつも，「特殊な」絶対説のように「同一性と種別概念の間に何らかの結び付きがある」とは認めない．この説によれば，同一性と種別概念の間に何か特徴的な原理や考えを見出す必要はない．なぜならば，「種別概念は同一性の規準を与える」という第1

節で想定された種別概念の役割そのものに疑問を投げかけるからである．例で言えば，川や水といった種別概念が（7）や（8）のような規準を与えるとは考えない．この主張が何を帰結するかは明らかである．絶対説を支持する古典的同一性説は，相対説や「特殊な」絶対説と異なり，（6）を正しい帰結として受け入れることができる．つまり，*a* と *b* が同じ川であるならば，それは同じ水でもあらねばならない．言い換えれば，同じ水でなくなれば，*a* と *b* はもはや――誤って同じ川だと一般に把握されがちだとしても――同じ川ですらないと認め，それを根拠に（R）を拒否するのである．

先に述べたように，（6）が誤りとされた理由が（7）と（8）に由来するとすれば，（7）と（8）を拒否する古典的同一性説にとって，相対説と「特殊な」絶対説は同じ穴のムジナであるように映るだろう．両者は言うなれば，種別概念によって同一性の規準が与えられる，または少なくとも川と水といった二つの種別概念がまったく異なる同一性の規準を与えると信じる点で「種別概念論（sortalism）」である．だが，絶対説それ自体は本来，種別概念論からは独立でありうる．そして，種別概念論こそが同一性について誤った見解を生む原因でありうる．このように論じることで，古典的同一性説は相対説や絶対説とも異なる独自の地位を築くのである．

こうして，我々はようやく三つ巴の対立構図を素描することができる．簡潔に要約すれば，こうである．第一に，一般的な絶対説は，古典的同一性説と「特殊な」絶対説に分かれる．両者はどちらも（A）を支持するが，どちらかと言えば前者は消極的な支持に留まり，後者は積極的に支持する．古典的同一性説は，（R）によって表される相対説を拒否するという点においてのみ（A）を支持する一方で，「特殊な」絶対説は，（AFF）および（FP）から（A）を導出できるという違いがあるからである．第二に，相対説と「特殊な」絶対説は，（FP）と（DCI）の正否という点において対立する．これは前節の内容と重なるため繰り返すことは控えよう．

第三に，種別概念論――これは相対説と「特殊な」絶対説の二つに代表される――と古典的同一性説は，前者が（6）の誤りを受け入れる一方で，後者が（6）を正しい帰結とみなすという点において対立する．この対立は，乱暴に言い切ってしまえば，種別概念による同一性の規準を重視するのかどうかと表裏の関係にある．このように，少なくとも三つの分岐点を有する構図が三つ巴の対立の全体像である．

では，最後にそれぞれの主張がどのように批判されうるのかに触れて，本論文を締めくくることにしたい．まず，相対説に対して投げかけられる批判は明白である．それは，第 2 節で示されたように（FP）を拒否して（R）を受け入れる代償として，（SLL）を受け入れることができないということである．相対説に従うと，同一者不可識別の原理を表す（LL）は（SLL）の省略形にすぎないため，（LL）もまた相対説においては偽となる．だが（LL）および（SLL）はウィギンズの言葉を借りれば，「本当の同一性に特有なものを［そうでないものから］区切り，推移性や対称性，反射性（…）では差別化されない意味で，本当の同一性を差別化する」[32] 原理である．相対説は，こうした「本当の同一性を差別化する」ものを諦めねばならない．これは，相対的同一性がその他の同値関係とほとんど変わりがないことを意味する．この意味で，相対説は「ショッキング」であり，「我々の古典的な同一性理解に著しく反する」のである [33]．

次に，「特殊な」絶対説に目を移すと，（DCI）を受け入れることにこの立場の特徴があるのだった．だが，この（DCI）は一見して奇妙である．というのも，川そのものとその川と時空領域を同じくする水を区別する点で，（DCI）は「時空領域が一致する個物は同一である」という直観に反するからである．同じことは，像と粘土の塊などのケースにも当てはまる．「特殊な」絶対説そのものは，時空領域において一致する個物がどのようにして二つありうるのかを教えてくれない．そのため，この立場に立つ代表的論者であるウィギンズやロウがともに「構成説（constitution

view)」と呼ばれる立場にコミットし，川と水の間の「構成」関係の解明を試みる必要に迫られたのは，決して偶然ではないのである．

最後に，古典的同一性説を考えよう．これの欠点は，端的に（6）を正しいとみなしてしまう点にある．川と水という種別概念に対する自然な理解に鑑みれば，「同じ川であること」と「同じ水であること」は本来まったく異なる事態なはずである．川に属する a と b が同じ水の部分を持たなくなると，それら部分を持つ全体としての a と b の間に同一性が成立しなくなるというのはあまりに極端な見解であるように見える．こうして見ると，古典的同一性説は，現代における「メレオロジカルな本質主義（mereological essentialism)」――「すべての全体は，それが必然的に持つような部分を持つ」[34]――と軌を一にする立場だと言ってよい．両者は，全体における部分の構成を過度に厳密に捉え，その変化を認めないあまりに，種別概念に対する自然な理解を放棄，あるいは歪めてしまいかねない点で共通している[35]．

註

[1] Geach（1962），p. 39. なお，引用中の記号は本論文のものに変えてある．

[2] 本論文において私は，a や b, X, Y などの図式文字を，対象言語（「同一である」や「ある種別概念 X について，$=_X$」を含む言語）にとってのメタ言語的変項として用いる．そのため，本来であれば，メタ言語的変項を含む「a は b と同一である」という表記は，準引用符を用いて「 a は b と同一である」と書かれるべきかもしれない．しかし，記号を単純化するため，本論文では対象言語（および対象言語の変項）とメタ言語（およびメタ言語的変項）の間に特別な区別を置かず，準引用符に相当するものを場合によれば引用符で代用することにする．

[3] 相対説は，Geach（1957); Geach（1962）などで表明されている．

[4]「特殊な」絶対説は，Lowe（2009); Wiggins（2001）などで表明されている．

[5] たとえば，人工物（東京ドームやビッグベンなど）や抽象物（2 や ℕ）を外延とするような概念が種別概念であるかどうかについては議論の余地があるだろう．差し当たりここで私は，ウィギンズやライトに従ってそれらが種別概

念から排除されるわけではないと考えるが（Wiggins（2001），pp. 91ff.; Wright（1983），pp. 25ff. を見よ），その考えに深く立ち入ることは控えたい．

[6] Dummett（1981），pp. 546ff.; Geach（1980），pp. 63ff.; Gupta（1980），p. 2; Lowe（2013），pp. 74ff.; Wiggins（1967），p. 43 を見よ．

[7] Frege（1884），p. 73, 邦訳 121 頁．フレーゲ自身が種別概念に直接言及することはなかったが，彼が事実上，数を種別概念の一つとみなしていたという可能性については，Dummett（1981），pp. 578ff.; Lowe（1997），pp. 619ff. を見よ．特にダメットによれば，フレーゲにとって同一性の規準とは，種別概念だけではなく，名前の意義（Sinn; sense）にも結び付けられる――異なる名前には異なる規準が与えられる――ものだとされるが（Dummett（1981），pp. 545f. を見よ），こうした立場に本論文がコミットすることはない．

[8] ここで言われる「一般的形式」とは，ロウやペリーによるいわゆる「1 レベルの（one-level）」図式的形式である（Lowe（2009），p. 16; Lowe（2013），p. 74; Perry（2002），pp. 70f. を見よ）．本論文では，紙幅の都合上，より単純な 1 レベルの形式のみに焦点を当て，「2 レベルの（two-level）」規準については考慮しない．2 レベルの同一性の規準については，Dummett（1981），pp. 580f.; Williamson（2013），pp. 145ff. を見よ．

[9] ネコや人間などの有機体について，「同じ生涯を持つ」という規準を与える戦略は，古くはロックにまで遡り，近年ではヴァンインワーゲンによって支持されていると考えることができる（van Inwagen（1990），pp. 144f. を見よ）．

[10] たとえば，「ある種別概念 X が提供する同一性の規準を形式化する際，そこに含まれる同値関係は，X の外延としての個物の同一性を前提するものを含んではならない」などが挙げられるが（Lowe（2013），pp. 75ff. を見よ），本論文では立ち入ることを控える．

[11] Lowe（2009），p. 73; Wiggins（1996），p. 240; Wiggins（2001），p. 25 における形式化と比較せよ．

[12] ギーチが挙げる例は，語トークンと語タイプ，サーマン（surman; 同じ姓を持つ人間）と人間，有理数と順序対などである（Geach（1972），pp. 245ff. を見よ）．

[13] もちろん，相対説が決して一枚岩ではないことには注意すべきである．「相対説」の内実は，どの主張を中心的なものとするかによって論者の間で大きく異なりうる．しかし，余計な煩雑さを避けるため，本論文において私が「相対説」の名のもとで論じる立場は，ギーチが提唱する（あるいは提唱しているように見える）ものに制限することにしたい．それは明らかに（R）を支持する立場である．

[14] Geach（1980）, p. 181. Geach（1962）, p. 157; Geach（1973）, p. 292 も見よ．なお，引用中の記号は本論文のものに変えてある．

[15] Geach（1957）, p. 69.

[16] Geach（1973）, p. 291.

[17] Geach（1980）, p. 216.（R）が本当に絶対的同一性の不在を含意するのかについては議論があるが（Dummett（1981）, p. 564 を見よ），本論文ではその議論には立ち入らない．

[18] 厳密には，（REF）は条件文の形式であるがゆえに弱い反射性を表す．たしかに，同一性の反射性を表す$\forall x\,(x=x)$をそのまま「同じF」に対応させると，$\forall x\forall F\,(x=_{F}x)$というより強い反射性を得るが，任意の対象がすべての種別概念に属するわけではないため，これは明らかに偽である．それゆえ，ここでは弱い反射性が採用されている．もしこの反射性を奇妙に感じるものがいるならば，条件文でない形式の$\forall x\exists F\,(x=_{F}x)$をおいてもよい．これは，「裸の個物の不在」，すなわち第 5 節で登場する（NBP）と（REF）の二つから導出することができる．ただし，ここでは簡便のため（REF）をひとまず採用しておく．

[19] 証明は省略する．詳しくは，Griffin（1977）, p. 20; Perry（2002）, pp. 5f.; Wiggins（1967）, pp. 2ff.; Wiggins（2001）, pp, 25ff. を見よ．

[20] フレーゲがこの原理を明確に支持していたというわけではないが，その原理の原型となるような次の言葉を引くことができる．「たとえば，「これらの線分は長さにおいて等しい［同じ長さである］」の代わりに，「これらの線分の長さは等しい」あるいは「同一である」と言い，「これらの平面は色において等しい［同じ色である］」の代わりに，「これらの平面の色は等しい」と言えばよい」（Frege（1884）, pp. 76f., 邦訳 126 頁）．

[21] Geach（1962）, pp. 150f.; Geach（1980）, pp. 174ff. を見よ．この二つの文献（第一版と第三版）では扱われている例が異なるが，わかりやすさのためここでは前者の例に従って川と水を用いることにする（例が変わった事情については *ibid*., p. 14 を見よ．また，ギーチの議論の再構成については Lowe（2009）, pp. 63f. も見よ）．なお，ここでのギーチの議論はもともと，制限された量化（restricted quantification）を無制限な量化に還元することができないという論点を支持したものであるが，その論点を（FP）の拒否を含意するものとして読むこともできる（とギーチ自身も考えている）．その理由は，クワインも指摘している通り，「量化は，絶対的に同じあるいは異なっているような変項の値が存在することに依存する」（Quine（1964）, p. 101）という仕方で，量化と同一性が密接に――不可分かどうかについてはさらなる検証を必要とする

が――関わっているためである．ただし，本論文ではギーチの議論を再構成して，制限された量化については考慮しない点に注意せよ．

[22] Geach (1962), p. 151. Geach (1973), p. 292 も見よ．

[23] ペリーもこの見方を支持している．(FP) の拒否こそ相対説の中心的な主張であり，そこから絶対的同一性の拒否が帰結し，(R*) および (R) は (FP) を拒否する際の証拠とされる (Perry (2002), p. 21 を見よ)．

[24] Lowe (2009), p. 2.

[25] Geach (1973), p. 289.

[26] 証明は省略する．詳しくは，Lowe (2009), p. 74 を見よ．

[27] 証明は省略する．詳しくは，*ibid*., pp. 75f. を見よ．

[28] この (NBP) において登場する束縛変項 F が，個物が存在する期間の一部にしか適用できない概念，すなわち段階的種別概念 (phase sortal) を包摂しないという点に注意せよ．そのため，時点を考慮した形で (NBP) を正確に述べ直すと，それは $\forall x \forall n \exists F (Fx@\mathrm{T}n)$ ではなく $\forall x \exists F \forall n (Fx@\mathrm{T}n)$ を表すはずである (「$@\mathrm{T}n$」は「Tn の時点において」を意味し，「Tn」は個物 x が存在する間の時点を指すものとする)．こうした点については，Wiggins (2001), p. 64; Lowe (2009), p. 75 を見よ．

[29] Quine ([1960] 2013), p. 97, 邦訳 171 頁を見よ．

[30] Geach (1962), p. 191; Geach (1973), p. 291 を見よ．

[31] この路線をとる例として，Gupta (1980) を挙げることができる．

[32] Wiggins (2001), p. 27. Wiggins (1967), p. 5 も見よ．

[33] もちろん，制限された (LL) ならば相対的同一性論者も擁護することができる (Griffin (1977), pp. 140ff. を見よ)．ただ，その制限が (LL) の価値を減じるものであるのは明らかである．我々は「あらゆる性質の不可識別性」が欲しいのであって，あるクラスに属する性質の不可識別性が欲しいのではない．

[34] Chisholm (1976), p. 145, 邦訳 243 頁．

[35] 本論文は，2015 年度 MIPS (三田哲学会哲学・倫理学部門) 例会において行った発表に基づいている．その場およびその他の機会に有益な質問・コメントをくださった方々，特に柏端達也教授にこの場を借りてお礼申し上げたい．また，本論文は科学研究費補助金 (特別研究員奨励費 15J08786) の助成を受けたものである．

参考文献

Chisholm, R. M. (1976), *Person and Object: A Metaphysical Study*, La Salle (IL):

Open Court Publishing.（R. M. チザム『人と対象：形而上学的研究』，中堀誠二（訳），みすず書房，一九九一年）

Dummett, M.（1981）, *Frege: Philosophy of Language*, 2nd edn., London: Duckworth.

Frege, G.（1884）, *Die Grundlagen der Arithmetik: Eine logisch-mathematische Untersuchung über den Begriff der Zahl*, Breslau: Verlag von W. Koeber.（G. フレーゲ『算術の基礎』，三平正明・土屋俊・野本和幸（訳），野本和幸・土屋俊（編）『フレーゲ著作集　第二巻：算術の基礎』所収，勁草書房，二〇〇一年）

Geach, P. T.（1957）, *Mental Acts: Their Content and Their Objects*, London: Routledge and Kegan Paul.

————（1962）, *Reference and Generality: An Examination of Some Medieval and Modern Theories*, Ithaca（NY）: Cornell University Press.

————（1972）, *Logic Matters*, Berkeley: University of California Press.

————（1973）, "Ontological Relativity and Relative Identity", in M. K. Munitz（ed.）, *Logic and Ontology*, New York: New York University Press.

————（1980）, *Reference and Generality: An Examination of Some Medieval and Modern Theories*, 3rd edn., Ithaca（NY）: Cornell University Press.

Griffin, N.（1977）, *Relative Identity*, Oxford: Clarendon Press.

Gupta, A.（1980）, *The Logic of Common Nouns: An Investigation in Quantified Modal Logic*, New Haven（CO）: Yale University Press.

Lowe, E. J.（1997）, "Objects and Criteria of Identity", in B. Hale and C. Wright（eds.）, *A Companion to the Philosophy of Language*, Cambridge（MA）: Blackwell.

————（2009）, *More Kinds of Being: A Further Study of Individuation, Identity, and the Logic of Sortal Terms*, Malden（MA）: Wiley-Blackwell.

————（2013）, "What Is a Criterion of Identity?", in his *Forms of Thought: A Study in Philosophical Logic*, Cambridge: Cambridge University Press.

Perry, J.（2002）, *Identity, Personal Identity, and the Self*, Indianapolis（IN）: Hackett.

Quine, W. V. O.（[1960] 2013）, *Word and Object*, new edn., Cambridge（MA）: MIT Press.（W. V. O. クワイン『ことばと対象』，大出晃・宮館恵（訳），勁草書房，一九八四年）

————（1964）, "Review of P. T. Geach, *Reference and Generality*", *Philosophical Review* 73, 100–4.

van Inwagen, P.（1990）, *Material Beings*, Ithaca（NY）: Cornell University Press.

Wiggins, D. (1967), *Identity and Spatio-Temporal Continuity*, Oxford: Blackwell.
————(1996), "Replies", in S. Lovibond and S. G. Williams (eds.), *Identity, Truth, and Value: Essays for David Wiggins*, Cambridge (MA): Blackwell.
————(2001), *Sameness and Substance Renewed*, Cambridge: Cambridge University Press.
Williamson, T. (2013), *Identity and Discrimination*, reissued and updated edn., Malden(MA): Wiley-Blackwell.
Wright, C. (1983), *Frege's Conception of Numbers as Objects*, Aberdeen: Aberdeen University Press.